

未明童話を読み直す季節 ―小川未明研究の現在―

宮川健郎

古田足日・鳥越信の死と「現代児童文学」の終わり

二〇一四年六月八日、児童文学評論家・作家の古田足日が亡くなった。八六歳。それより前、二〇一三年二月一四日、児童文学研究者の鳥越信が亡くなった。八三歳。

古田足日は、『宿題ひきうけ株式会社』『大きい1年生と小さな2年生』『ロボット・カミイ』などの創作や、画家・田畑精一と共作の絵本『おしいれのぼうけん』などで子どもたちによく知られているが、もともとは評論家である。鳥越信も、出発期は評論家だった。一九五〇年代、古田・鳥越というふたりの評論家が日本の現代児童文学を提案したのだ。ふたりの死は、今後、児童文学研究にも大きな影を落としていくと思われる。

古田と鳥越がまだ早稲田大学の学生だった時代、神宮輝夫、山中恒ら早大童話会のメンバーとともにマニフェスト「少年文学」の旗の下に！」を発表し（『少年文学』一九五三年九月）、「童話精神」から「小説精神」への転換をうったえた。このマニフェストがきっかけになって、それまでの子どもの文学のありかたを見直し、新しい文学を模索する議論が巻き起こる。「童話伝統批判」と呼ばれる議論である。議論を引き受けて、現代児童文学が成立したのは、佐藤さとる『だれも知らない小さな国』やいぬいとみこ『木かげの家の小人たち』が刊行された一九五九年だと考えられる。大正から昭和戦後にかけての「童話」は、詩的で象徴的なことばで心象風景を描いた。「現代児童文学」は、もっと散文的なことばによって、心

のなかの景色ではなく、子どもという存在の外側に広がっている状況（社会）を描く。敗戦後の子ども文学は、戦争や、戦争を引き起こす社会を描かないわけにはいかなかったのである。詩的なものである童話は短編のかたちをとったが、散文性を獲得した現代児童文学は長編化する。

古田足日、鳥越信のふたりが亡くなったいま、「現代児童文学」が日本の子ども文学のある時代をつくった考え方として浮かび上がり、その時代が終わったともいえる。

小川未明批判と、未明的な主題の復権

一九五〇年代の「童話伝統批判」の議論のなかで、批判が集中したのは小川未明の童話だった。古田足日は、未明童話のことばを近代人の心よみがえった呪術・呪文とし（「さよなら未明」、『現代児童文学論』一九五九年、くろしお出版所収）、鳥越信は、未明が人が死ぬ、草木が枯れる、町がほろびるなどネガティブな主題を書いたとして批判した（「解説」、『新選日本児童文学』一、一九五九年、小峰書店所収）。

「童話伝統批判」の議論をへて、アクティブな方向をめざすことになった現代児童文学は、子どもを成長のイメージでとらえようとしてきたとは、石井直人の指摘である（「児童文学における〈成長物語〉と〈遍歴物語〉」の二つのタイプについて、『日本児童文学学会々報』一九八五年三月）。日本の現代児童文学の多くは、「一つの人格という立体的な奥行きをもつ

た個人」が主人公となり、「主人公が経験したことは、その内面に累積していつて、自己形成が行われる（ルビ原文）」、「成長物語」として書かれたというのである。農村の貧しさを何とかしようと努力する少年主人公を描いた、松谷みよ子の『龍の子太郎』（講談社、一九六〇年）や、気弱な自分を変革しようと旅に出る中学生が主人公の、今江祥智『山のむこうは青い海だった』（理論社、一九六〇年）を代表的な作品としてあげておこう。その現代児童文学も、八〇年代以降は、かなり変化する。私が変わり目のしるしとして意識してきたのは、一九八〇年の那須正幹の長編『ぼくらは海へ』（偕成社）である。那須は、息苦しい現実をのがれて、死へと船出する少年たちを描いた。

一九五九年の鳥越信が否定し、長くタブーとされてきた死の問題など、ネガティブな主題をむしろ積極的に描こうとしたのは、一九七五年に『きみはサヨナラ族か』（金の星社）でデビューし、『少年時代の画集』（講談社、一九八五年）や『ホーン岬まで』（くもん出版、一九九〇年）などで話題になった森忠明だった。森忠明の作品で、未明的な主題は、明らかに復活してくる。

森の『少年時代の画集』も『ホーン岬まで』も短編集だが、『少年時代の画集』に「楽しい頃」と題された一編がある。語り手である「おれ」は、小学六年生。三年前から、ビールス性肝炎にかかっている。薬の副作用で、くちびるの右はしに枯れ葉色のしみがある。しみを気にしたかあちゃん、ご教主さまのところへ「おれ」をつれていく。ご教主さまに「肝臓の病は先祖の不徳義あらわれ」といわれて、そこをとびだした「おれ」は、その足で、友だちだった沢辺圭吾の墓まいりに行く。病気の「おれ」をいたわってくれた沢辺は、給食のときに嘔吐した。沢辺の脳みそにはできものがあつた、彼は、それで死んだ。沢辺のおやじさんにたのまれて、「おれ」は、彼の骨つばに彼の名前を書く。墓前で、「おれ」は、「八段錦！」とさげんで、まえに沢辺が教えてくれた、内臓を強くする中国体操を奉納する。『少年時代の画集』で、森忠明が描いたのは、何かをうしなってしまう子ども、何かからはぐれてしまったような子どもばかりだ。「おまえは

口がわるいから、口のはしにしみなんかできるんだ。人生でいっとう楽しい頃なのに、けちがついたみたいでやなんだよ。その口のが。」とは、「楽しい頃」のかあちゃんのせりふだけれど、『少年時代の画集』に登場する「おれ」や「ぼく」の人生には、すでにけちがついてしまっているように見える。しかし、家庭崩壊や、受験戦争での敗北などを経験することが多くなった現代の子どもたちには、ここにある「喪失」の気分が案外ちかしいものになっているかもしれない……。『少年時代の画集』が刊行された当時、そんなふう考えた。人生にとつて重大な挫折や、近親者の死とぶつかることを引きのばされた「楽しい頃」が子ども時代だともいえるが、その子ども時代にも、明るい「光」の部分と「影」の部分がある。人が死ぬ、草木が枯れる、町がほろびるといったネガティブなものを排除してきた現代児童文学は、子ども時代の「光」を描くことに熱心だったが（一九四八年生まれの森忠明より五歳年上の後藤竜二などを、そうした傾向を代表する作家とすることができると、森は、子ども時代の「影」をあえて書こうとした。「光」と「影」とで、子ども時代の「全体」だからだ。

一九九〇年代になると、児童文学／文学のボーダレスということがいわれた。本来は子どもが読者のはずの児童文学の読者層の上限が上がっていき、児童文学は、大人の読み物にもなった（江國香織『つめたいよるに』理論社、一九八九年など）。これは、「未分化の児童文学」の再来ともいえる。かつて、古田足日が未明童話を「未分化の児童文学」としたのだ（『自分の内にある伝統のたたかひを』、『日本児童文学』一九六一年一〇月）。「大人の文学から完全に分化していない児童文学」のことだという。

未明を読み直す

現代児童文学の変化にとまなうように、未明童話の読み直しも、徐々にはじまっていった。

私自身は、編著『名作童話を読む 未明・賢治・南吉』（春陽堂書店、二〇一〇年）で読み直しを試みた。これは、同じ版元から刊行した、やは

私の編集による『名作童話 小川未明30選』（二〇〇九年）、『同 宮沢賢治20選』（二〇〇八年）、『同 新美南吉30選』（二〇〇九年）の三冊をそれぞれそれぞれの方に読んでいただき、私と三人でおこなった鼎談三つを中心に編んだ書物である。

『鼎談・『名作童話 小川未明30選』を読む』に登場してくださったのは、杉みき子さんと栗原敦さんである。杉さんは、小川未明の故郷である高田で書きつづけている児童文学作家、栗原さんは、宮沢賢治や近現代詩が専門の研究者で、小川未明文学館の創設にもかかわった方だ。どの鼎談も、テキストにした『名作童話』のなかから、ご自分のベスト3の童話をあげていただくことからはじめたのだが、杉さんの三つは、「山の上の木と雲の話」「大きな蟹」「野薔薇」だった。栗原さんは、三つより多く、「牛女」「野薔薇」「負傷した線路と月」「二度と通らない旅人」をあげた。私の30選は、未明童話のスタンダード・ナンバーをならべたようなものになったのだけれど、おふたりとも、やはり、「赤い蠟燭と人魚」ははずせないとも発言している。私が編んだのは、未明童話の30選だが、鳥越信は、「小川未明は俗に一千編の童話を書いたと言われている」と述べていた（『研究の領域と方法』、日本児童文学学会編『日本児童文学概論』東京書籍、一九七六年所収）。ところが、最近では、未明童話は約千二百編と考えられている。作品を数え足したのは、小笠裕二だ。小笠が編集した『小川未明新収童話集』全六巻（日外アソシエーツ、二〇一四年）には、『定本小川未明童話全集』全一六巻（講談社、一九七六～七八年）に未収録の三七四編と新しく発見された八〇編が収められている。ようやく、未明童話の全貌が明らかになってきたといえる。

「新収」童話集でありながら、編年体で作品を収録した全六巻の各巻解説は、未明童話のありかたの変遷をよく見渡すものになっている。私の30選もそうだが、これまで、未明の童話に専念することを宣言した「今後を童話作家に」（『東京日日新聞』一九二六年五月）までの作品がよく読まれ、それらを中心に考察されてきた。小笠裕二は、『新収童話集』第二巻の解

説「静の気持と動の気持」で、未明の童話作家宣言とそれ以後の作品について、こう書いている。

「大正中期以降、未明の小説と童話はこれまでもまして激しくせめぎあう。（中略）」

この時期、小説と童話の緊張は最高潮に達し、ある小説は童話化し、ある童話は小説化していった。私の考えでは、まず小説の童話化がおこり、やがて第3巻に収録される童話に見られるような、童話の小説化がおこる。小説の童話化といった実験があつたために、〈童話作家宣言〉以後の未明童話の分化が可能になったと考えられる。大人の読者向けに書かれた童話の小説化、幼年の読者向けに書かれる童話の詩化など、表現は多彩になっていく。童話ジャンルの枠組みを用い、未明はどのような読者に対しても、またどのような内容をも表現することを可能にしていったと思われる。」

『新収童話集』だけでなく、小笠裕二は、未明研究において、めざましい仕事をかさねている。『人物書誌大系』の一冊として刊行された『小川未明全童話』（日外アソシエーツ、二〇一二年）は、『新収童話集』編纂の準備作業にもなっている。このほか、『解説 小川未明童話集45』（北越出版、二〇一二年）、『新選 小川未明秀作童話50 ヒトリボッチの少年』（蒼丘書林、二〇一二年）、『新選 小川未明秀作童話40 灯のついた町』（同前、二〇一三年）、『解説 小川未明小説1』（私家版、二〇一四年）、『新選 小川未明秀作随想70 ふるさとの記憶』（蒼丘書林、二〇一五年）といった

編著も刊行した。

小笠裕二の仕事を見ると、小川未明を読み直す季節が、もうはつきりやってきたことがわかる。北国におそい春がおとずれるようにである。未明童話の読み直しは、同時に、未明批判をとおして成立した日本の現代児童文学のありかたを考え直すことにもなってくる。

「呪術よみがえる」日

現代児童文学を成立させた作品の一つ、佐藤さとの『だれも知らない小さな国』の刊行後間もなく、石井桃子が子どもたちへの読み聞かせの報告をおして作品を批判している（「子どもから学ぶこと」、『母の友』一九五九年一月）。石井は、「読んでやったり、口で話したりできないお話は、子どもにはおもしろくない」と考えて読み聞かせをしたのだが、佐藤さとのほうは、黙読で物語を楽しむ十代の子どもたちを読者として意識していただろう。音読する「声」とわかれた佐藤さとの以降の現代児童文学は、読者層の中心を年上の子どもへと移動させ、黙読される書きことばとして緻密化していく。そのことによって、さまざまな主題を深めることにもなったのである。現代児童文学を考え直すとき、この「声」という児童文学の身体性の問題は見落とせない。

小川未明の童話は、「声」とむすびついていた。古田足日は、未明童話の性格を「近代人の心によみがえった呪術・呪文」としたが（「さよなら未明」前掲）、「呪文」だとすると、それは、声に出してこそ意味がある。古田は、「赤い蠟燭と人魚」の書き出しの文章を引き合いにした。

「人魚は、南の方の海にばかり棲んでゐるではありません。北の海にも棲んでゐたのであります。

北方の海の色は青うございました。ある時、岩の上に女の人魚があがつて、あたりの景色を眺めながら休んでゐました。

雲間から洩れた月の光がさびしく、波の上を照らしてゐました。どちらを見ても限らない、物凄い波がうねくと動いてゐるのであります。」

古田も指摘しているが、たとえば、「北方」は、「海」を限定することにはなっていない。「北方」は、「海」の地理的な位置を説明するのではなく、ひたすら、「暗くさびしく孤独」（古田）な気分をかもし出すことばな

のである。だから、まさに「呪文」なのだが、「赤い蠟燭と人魚」を声に出して読むとき、読者の心を「暗くさびしく孤独」な気分が満たしていく。「さよなら未明」を巻頭におさめた古田足日の第一評論集『現代児童文学論』の「あとがき」は、「最近読んだ本のなかで、いちばんおもしろかったのは、安部公房の「第四間水期」と西郷信綱の「万葉私記・初期万葉」でした。」と書き出されている。「おそらくこのあたりに、ぼくの求める児童文学の姿がかくれているような気がします。「第四間水期」では、現実には奇妙な二重構造を持っており、その表皮をはがしていくと現れてくるのは、……」と述べたあと、つぎのように書かれている。

「人間をとりかえし、新しい時代を作るには、壮大なエネルギーが必要です。「万葉私記」の世界では、愛情も自然に対する態度も、今のようにはわい小化されておらず、ことばは創造力に満ちています。ぼくはずっと日本近代童話の呪文的性質の清算を主張してきましたが、今、新しく「呪術よみがえる」日を期待しています。」

古田足日は、「呪術よみがえる」日といったが、私は、いま、あらためて小川未明を豊かに読み直すことが求められていると思うのだ。

〔付記〕『日本近代文学』第91集（日本近代文学会、二〇一四年一月）に掲載された拙稿「児童文学という概念、テキストとしての児童文学」と一部内容が重複することをおことわりします。